インドネシアバリ島における大学生と高校生の職業選択に関する意識の比較

Comparison of consciousness concerning career choice between undergraduate students and high school students in Indonesia, Bali.

文教大学国際学部　黛　陽子※

筑波大学生命環境科学研究科　水野谷　毅

筑波大学名誉教授　氷鉋　揚四郎

１.はじめに

本研究では、発展途上国の世界的観光リゾート地、インドネシア，バリ島における、国家政策に始まって成長した観光業の発展と、それに伴う現地住民の生活を支える自給自足の農業の衰退、これらに影響を受ける若者の職業選択に着目している。さらに、未来のあるイメージの観光業とそれが無い農業とは別の価値観が存在し得るかどうかについて捉えること、また観光エリアと農業エリアの職業選択の考え方の違いが存在し得るかという課題を持っている。これらの課題に対し、現地人の職業選択の現状を捉えるために，職業選択を行う立場にある現地住民の若者の職業価値志向を知る意識調査に2015年より取り組んでいる。

一般的に、農業人口が減少し、かつ農業従事に未来が見いだせない現状では、職業選択を行なう若者世代は、経済的に潤う産業へ流出せざるを得ない。これは容易に想像できることだが、現地住民の職業選択に関する実際の現状は明らかにされておらず、この実態を定量的に示した上での具体的な地域の対策を講じることはなされていない。本研究では、この実態や職業選択に対する意識構造を明らかにし､政策的には県行政や州政府に農業振興支援策づくりの働きかけを意図する｡また、学術的には、社会学的調査の分野で住民意識調査に関する研究としての提案を意図している。さらに本研究の成果は、同じ様な事情を抱える発展途上国の国際観光島における農業の衰退と若者の職業選択についての事例研究となるため、発展途上国における持続可能な観光業と農業の発展への知見として提示することを意図している。

２.第一次産業の現状

発展途上国における国際観光地の開発は、経済発展のための外貨獲得策として政府主導で進められている。その一方で、インドネシアでは農業を代表とする第一次産業に従事し生計を立てている住民はインド・中国に続く世界3位（ILO（International Labour Organization）2016）で、人口の6分の1の3800万人とであることから、人口の多くが第一次産業に従事していることがわかる。本研究で調査対象としているバリ島は、2004年における第一次産業従事者は人口の4割と報告された。また、ツーリズムの進展とともに、バリ島の人口は1985 年の255万8479人から、2004年には317万9918人と20年間で1.24 倍に増えた。バリ州における土地利用の変化を概観してみると、1985年から2004年の間に、水田（LahanSawah）が9万8830ヘクタールから8万2053ヘクタールと一貫して減少し続けており、畑（Tegalan）が14万7185ヘクタールから12万9124ヘクタールと1万8061ヘクタール減少している。こうした土地利用の変化は、ツーリズムにともなう人口や世帯数の増加と関連づけて理解できよう。さらに､2014年の職業センサス結果によれば､バリ島での職業に就く人々は約230万人（バリ島の人口：約390万人），事業部門別で最も従事者が多いのは，貿易，ホテル，飲食部門の約63万人で職業人口全体の27.6％，現在では，バリ州の収入の三分の二を観光業が占めている。次いで農業で，農業，林業，水産部門は約54万人で24.0％を占める。これは、2004年の4割に比べ減少してい

るとみられ，さらに2016年2月までのこの部門の労働者の数は10％減少していると報告された。また、バリ島農業センサス2013によれば、農地利用者は、人口約400万人のうち2003年では48万5531人で、2013年には40万4507人で10年で約2割減少している。バリ島での主要な産業の１つは農業でありながら，働き手は主に観光業に流出し，農地利用も年々減少していることがわかる。

3. 本研究の目的

発展途上国の世界的観光リゾート地における観光業の発展と同時に農業の衰退という課題があり、その課題に職業選択がどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には次の３点を本論文で明らかにしたい。

① 職業選択における考え方
② 農業を職業として選択する際の考え方
③ 人気職業別の職業選択への考え方の違い

また、本研究の仮説としては、「発展途上国の世界的観光リゾート地における現地住民である若者は、職業選択において華やかな世界で働くことが出来、かつ収入が高い観光業を選ぶ」とし、これを検証することを試みる。

4. 先行研究と調査計画

日本で職業選択に関する研究が取組み始められたのは、1980 年代（例えば下山 1986）の大学生を対象とする職業選択研究で、その後現在に至るまで心理学や社会学で多くの研究がなされている（例えば安達2003、 2004　藤森1983　安田1999等）。自分自身が一般的に仕事に求めることの概念は「職業志向」と定義される。さらに、この職業志向は、生活を維持するための「経済的価値」と、自分の存在価値を見いだす社会的役割に関わる「社会的責任」に関係する（盧2016）。これはClausen（1986）によれば、「職業志望が経済的状況に左右されるのは事実だが、労働市場だけに依存するわけではなく、両親の意見や指示、個人的関心の発達、人との出会い、さまざまな生活体験などが絡み合って形成されていく」という点で説明できる。このように、職業志向は「経済的価値」にとどまらず、自分の価値が見いだされるきっかけとなる「社会的責任」とも関連しながら決定される（前田2009）。さらに、ウィリアムズ（1974）によれば、この「経済的価値」や「社会的責任」は、「おもに連続する過程、それもしばしば欲求、好み、自己発見、感化、機会それに経験などの何年間にもわたる相互関係の結果が影響する」と述べている。この職業選択を「過程」とみなす理論には、Ginzberg、およびSuperの研究の功績がある。Ginzbergは「それぞれの決定は、その時点に至るまでのその人の経験に関係し、かわって将来に影響を及ぼすのであるから、決定する過程は基本的に変更できない」と述べ、職業志望は一時点のものではなく、長い期間を通じて行われる過程であるという分析を導き出している（Ginzberg等1951）。

先行研究における職業価値志向の調査の方法は、本人が自分の仕事に求める重要な価値を尋ね、その価値に関わる自分の気持ちの大小を尺度で回答するリッカートスケール方式をとっている。その価値とは家族をはじめとした個人の生活史で培われた価値観を一つ質問ではなく、複数の視点で測定する。その項目数は、最小で 4、最大では 230 にもなると報告される。

上述の内容を参考とし、本研究における意識調査の内容についても、「経済的価値」や「社会的責任」、さらに「家族の影響」と「自分自身の価値観」が反映されるような質問項目を準備し、かつリッカートスケール8段階を採用した。この意識調査に関しては、職業選択に関する意識を知るために、個人的な事情と，特に観光業と農業への志向を調査し，これらにどのような意識構造があるのかを明らかにすることを意図している。

意識調査のアンケート内容は、「フェースシート」「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」「農業と観光業の融合（アグロツーズム）の印象」に関する5つの分野に分けた（表1)。2016年実施の大学生に関しては59問、2017年～2018年実施の高校生に関しては大学生の結果でわかりにくい質問を見直し56問の構成とした。なお、観光業と農業に関する職業の

印象については、両者への考え方を比較するために、同じ質問内容で農業と観光業の言葉を入れ替えた形とした。フェースシート以外の4つの分野の質問項目に関しては、「あてはまる」から「あてはまらない」について8段階で尋ねるリッカートスケール形式となっている。

表１　意識調査の詳細

	大学生	高校生
調査期間	2016年4月～5月	2017年6月～2018年2月（途中で火山爆発により、11月から1月まで調査を中断）
依頼方法	各大学に直接訪問し、教員へ依頼	アンケート調査の回答態度を考慮し、レベル高い国立第一高校（普通科）に限定し、各高校の校長へ直接依頼。調査は担当教員へ直接渡し、現地研究担当者が直接調査の説明を行ないその場で授業の時間を使って実施。
	教員による受け入れが金銭が必要な場合には、門に立ち学生に直接依頼	国立高校のため、国立高校からの調査許可を得るまでに数ヶ月の待機期間（2017年6月から9月）があった
対象	バリ州にある国立と私立の9つの大学 国立ウダヤナ大学50名 国立観光大学44名 国立サラスワティ大学49名 私立観光経営大学49名 国立ガネーシャ教育大学42名 私立健康科学大学46名 私立外国語大学44名 私立情報技術大学33名 私立教育大学50名	バリ島におけるすべての、カブパテン（県）と呼ばれる第二級地方自治体(Daerah Tingkat II)の1校以上の国立普通高校を対象 バドゥン県 Kabupaten Badung 36名　33名　35名　41名 バンリ県 Kabupaten Bangli　39名 ブレレン県 Kabupaten Buleleng　39名 ギャニャール県 Kabupaten Gianyar　40名　42名 ジュンブラナ県 Kabupaten Jembrana　高校より許可が出ず調査できず カランガスム県 Kabupaten Karangasem　40名 クルンクン県 Kabupaten Klungkung　40名 タバナン県 Kabupaten Tabanan　高校より許可が出ず調査できず デンパサール市 Kabupaten Denpasar　34名
被験者総数	406	419（回答欠損データ16）　対象データ403
男女比	男=163（39%）　女=235（57%）　不明=8	男=174（39%）　女=224（57%）　不明=20
質問数	59	56
質問内容	フェースシート9問、自分の職業観10問、観光業に関する職業の印象17問、農業に関する職業の印象17問、農業と観光業の融合（アグロツーズム）の印象6問	フェースシート9問、自分の職業観10問、観光業に関する職業の印象15問、農業に関する職業の印象15問、農業と観光業の融合（アグロツーズム）の印象7問
調査実施責任	インドネシア政府認可環境財団Bali Biodiversitas	

バリ島全土からの平均的な考え方が得られるように、大学生はバリ州（インドネシアの地方行政区画、州は最上位の地方自治体）にある国立と私立の中大規模の９つの大学、高校生はバリ州におけるすべての、9つのカブパテン（県）と呼ばれる第二級地方自治体(Daerah Tingkat II)で各1校以上の国立普通高校を対象とした。大学生の調査は2016年5月に、高校生は2017年6月から2018年2月にかけて行なった。調査票を回収した大学生被験者は406名、高校生は419名である。

5. 調査結果

大学生と高校生を被験者とする得られたデータに関して、単純集計、平均値の比較、因子分析、回帰分析を用いて分析を行なった。データの信頼性係数は、大学生の結果は 0.922、高校生の結果は 0.901（どちらもクロンバックのアルファ係数）であり、アンケート調査の信頼性の高さは担保された。

5.1 職業選択における考え方

イ）　高校生と大学生が希望する職業

被験者が希望する職業は共に、観光業、公務員、次に医療関係に職業の人気が高かった。高校生では、1. 公務員 26%104 人、2. 観光業 22%88 人、3.医療 22%87 人であり、大学生では、1. 観光業 50%178 人、2. 公務員 24%87 人、3.医療 10%35 人であった。特に大学生については、被験者の半数が観光業に就くことを希望していたが、これは被験者の中に観光専門大学２校(95名)が含まれている影響（専門を問わず本調査依頼の受入れ可能な学力が上レベルの大学を対象としたため）を考えると、高校生と同じ程度の割合と推測される。全体としては観光業と公務員が同じ程度の人気があることがわかった。一方、農業を希望したのは高校生で 2%8 名、大学生 1%5 名のみであった。また、この設問では大学生の調査時には、バリ島の職業の種類について「その他」が明確でなかったため、被験者にインタビューを行ない、サービス業の中に含めていた自営業を独立させた。高校生の調査時には「自営業」を追加した。

ロ）　高校生と大学生の希望する職業と親の職業の関係

次に、高校生と大学生の希望する職業と親の職業についてのクロス集計を行った（表 2, 表 3)。

親の職業は、高校生では 1.自営業 98 人、2.公務員 70 人、3.観光業 67 人であり、農業は 4 位

の 65 名であった。大学生では 1. その他 89 人、2. 農業 92 人、3. 観光業 82 人、であった。その他は多くが自営業と考えられる。親の職業と被験者の職業希望のクロス集計の結果、農業に就く親を持つ者の、高校生については 48%31 名、大学生では 40%37 名が観光業を希望していた。また、高校生については 17%10 名、大学生では 41%31 名が公務員を希望している。公務員に関しては、公務員に就く親を持つ者の、高校生については 39%の 27 名、大学生では 33%の 25 名が公務員を希望している。これらの結果から、親が農業に就いている被験者に人気のある職業は 1. 観光業、2. 公務員であり、公務員につく親を持つ被験者は、公務員か観光を多くが希望していた。高校生も大学生も 1%未満しか農業へ進まないことがわかった。

表 2　高校生の希望する職業と親の職業

		親の職業										合計	
		観光	農業	畜産	公務員	医療	サービス	会社員	建設	自営業	その他		
高校生 希望の職業	観光	22	31	0	6	0	1	3	1	21	2	87	22%
	農業	1	5	0	1	0	0	0	0	1	0	8	2%
	公務員	17	11	6	27	0	1	20	2	18	2	104	26%
	医療	8	10	1	25	6	0	11	3	21	3	88	22%
	サービス	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1%
	会社員	11	3	0	6	0	0	18	1	20	0	59	15%
	建設	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1%
	自営業	3	3	0	2	0	0	3	0	12	1	24	6%
	その他	3	1	0	3	0	0	6	0	4	7	24	6%
合計		67	65	7	70	6	2	61	7	98	15	398	

*注
観光（ホテル、ホームステイ、アートショップ、ガイド、旅行代理店、温泉、観光のためのレストラン）
農業（農家、農産物の販売）
公務員（教師、政府、軍、警察）
医療（医師、助産師、看護師、薬剤師）
サービス（百貨店従業員、スーパーマーケット、ファーストフード、ガソリン）
会社員（銀行、保険、輸出入、建築家、司法・行政書士、弁護士）
建設　（建築士、大工）
自営業（商人、彫刻家、画家、ドライバー）

表 3　大学生の希望する職業と親の職業

		親の職業							合計
		観光	農業	公務員	医療	サービス	会社員	その他	
大学生 希望の職業	観光	56	37	31	1	4	3	45	178
	農業	2	1	0	0	0	0	1	4
	公務員	10	38	25	0	1	2	11	87
	医療	6	12	6	3	1	1	6	35
	サービス	0	0	0	0	0	0	1	1
	会社員	2	1	4	0	2	0	3	12
	その他	6	3	10	1	0	0	22	42
	合計	82	92	76	5	8	6	89	359

ハ)　「職業選択の考え方」の質問群における回答傾向

次に、「職業選択の考え方」に関する 10 の質問群（表 3 の縦軸参照）について、大学生と高校生の結果を比較した（表 3)。因子分析の最尤法（プロマックス回転）を用い分析した結果を表 3 に示す。高校生（標本妥当性 0.770 有意確率 0.000）は 4 因子得られた。第 1 因子が約 3 分の 1 の考え方を象徴しており、職業選択での重要な点は、「より高い収入を得て自分の家族を助けることができること」、であった。第 2 因子は「若さによる華やかな世界への挑戦」、第 3 因子は「自分の意志で社会に役立てる職業に就くこと」、第 4 因子は「周囲への自慢が出来る職業に就くこと」、であった。続いて、大学生（標本妥当性 0.821 有意確率 0.000）は 3 因子得られた。第 1 因子は「家族と公共の利のために自ら職業を選ぶ」、第 2 因子は「高校生と同じく若さによる華やかな世界への挑戦」、第 3 因子は「家族の事情に左右されて職業に就くこと」、であった。高校生と大学生に共通する点は、職業選択は家族を助けるためという気持ちが大きく、しかしながら若いうちは華やかな世界に挑戦する、という考え方を持っていることがわかった。

表 3　「職業選択の考え方」高校生と大学生因子分析の結果

	高校生				大学生		
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第1因子	第2因子	第3因子
お金への執着	0.736	0.034	-0.123	0.066	0.674	0.100	0.047
家族を助けたい	0.726	0.053	-0.046	-0.269	0.929	-0.179	-0.060
自慢	0.554	0.087	-0.006	0.305	0.357	0.282	-0.028
宗教行事のための資金	0.428	-0.105	0.330	-0.093	0.525	0.040	0.134
都会志向	0.410	-0.126	0.113	0.224	0.262	0.207	0.129
華やかさ	0.020	0.645	0.039	-0.056	-0.070	0.792	-0.013
若さ	-0.013	0.636	0.040	0.042	0.090	0.708	-0.034
社会貢献	-0.025	0.029	0.644	-0.135	0.482	0.143	0.002
自分の意思	-0.042	0.083	0.513	0.137	0.476	0.026	-0.131
家族の事情に左右	-0.006	0.001	0.017	-0.104	-0.017	-0.023	1.003
因子寄与率（%）	28.5	12.3	11.5	10.2	37.2	11.6	10.5
	KMO標本妥当性0.770				KMO標本妥当性0.821		
	有意確率p>0.000				有意確率p>0.000		

ニ）　男女の意識の違い

本調査のすべての質問群で各質問がリッカートスケール 8 段階となっている、「職業選択の考え方」「観光業に関する職業の印象」「農業に関する職業の印象」「農業と観光業の融合（アグロツーズム）の印象」の質問に関し、男女の回答傾向について、大学生と高校生の結果をそれぞれ平均値の差（マンホイットニーU 検定）を比較した（表 4)。その結果、高校生大学生共に、男女の回答傾向に平均値の差が見られた質問は「農業に関する職業の印象」質問群のみで、この質問群の中で 5 問あった。それらは、「農業で働いてみたい」（高校生 p<0.000,大学生 p=0.003），「自分の夢は農業で働くことである」（高校生 p=0.040,大学生 p=0.020），「農業での仕事は観光業の仕事より魅力的だと思う」（高校生 p=0.031,大学生 p=0.061）「今でなくいつか農業で働きたい」（高校生 p<0.000,大学生 p<0.000），「家族は農業で働く事に期待している」（高校生 p=0.013,大学生 p<0.000）であった。これについて、男女の平均値を見ることで具体的な考えの違いを検討すると、男女の平均値の開きが大きいものは、高校生・大学生共に「今でなくいつか農業で働きたい」であり、大学生はその他「農業で働いてみたい」、「自分の夢は農業で働くことである」、「家族は農業で働く事に期待している」となった。いずれも男子のほうが各設問の考えがより多く当てはまる傾向を示している。これはつまり、男子のほうが農業で働くことを想定すると、自己の関心と周囲の状況から農業で就労しようとする意思が高くなるだろうことがわかった。

表 4　「農業に関する職業の印象」質問群における男女の回答傾向の差

		高校生			大学生		
		有効回答数	回答平均値	p値	有効回答数	回答平均値	p値
農業で働いてみたい	男	178	2.8	p<0.000	148	3.8	p=0.003
	女	218	2.4		212	3.2	
自分の夢は農業で働くことである	男	177	2.3	p=0.040	147	3.5	p=0.020
	女	217	2.1		211	2.9	
農業での仕事は観光業の仕事より魅力的だと思う	男	177	3.0	p=0.031	148	3.9	p=0.061
	女	218	2.8		212	3.5	
今でなくいつか農業で働きたい	男	178	3.1	p<0.000	148	4.1	p<0.000
	女	218	2.6		209	3.3	
家族は農業で働く事に期待してい	男	177	2.2	p=0.013	148	3.3	p<0.000
	女	218	1.9		210	2.6	

5.2　農業を職業として選択する際の考え方

イ）　農地所有の有無と自分の農業継承責任

被験者の実家が農業に関わっている者（小作人を雇う、農地を貸すなどの農業が職業でない家も含む）で、農地所有の有無と自分の農業継承責任について質問した。その結果、高校生については親が農業であり、農地の所有の有が 64%77 人で、農業の継承責任が 25%30 人であった。同じく大学生では 68%106 人、31%48 人であった。農地所有が有であり、かつ農業の継承責任が有で

ある者は、高校生では 25 人で全体の 6%、大学生では 41 人で全体の 10%存在した。これは先の 5.1 で示した農業希望者の結果（高校生 8 人，大学生 4 人）と比較すると、このあてはまる者の多くが農業を継承しないことがわかる。これはバリ州政府から警鐘を鳴らされている「農家の子供たちは、農業部門外で働くことを好むため、両親の努力を継続することを期待する」という警告が発せられた通りの結果となっている。つまり、農地を所有しており農業の継承責任がある者も、多くが卒業後の希望職業が農業ではないことがわかった。

ロ） 農業で就労することの印象

本調査では、農業従事希望者が少ないことを想定し、あらかじめ農業に就くことを想定した印象についても尋ねた。被験者が農業に就かなくとも、就くことを想定し、どのような考えを基礎として農業を選ぶ可能性があるのかについて回答を得た。

はじめに、農業に就くことを想定した質問群の 15 問について、「収入の高さ」を従属変数とし、その他 14 問を独立変数として回帰分析（最適尺度法）を行なった（表 5）。その結果、高校生は、現在の「実家の家族の貧困と将来の自分が持つ家族のために自分自身の意志で農業に就きたい」と考え、大学生は、現在の「実家の家族の貧困と将来の自分が持つ家族のために好ましくないけれど自分の意志で農業に就きたい」、と考えていた。

次に、同じく「今でなくいつか農業で働きたい」を従属変数とした場合は、高校生は、「将来の成功を夢見て、自分の将来に持つ家族のために自分の意志で農業に就きたい」と考え、大学生は、「農業の将来の明るい見通しによって、周囲の人が農業にだろうから自分の貧しい真族を助けるために農業に就きたい」と考えていた。

次にこの 15 問についての因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果を示す（表無し）。高校生に関して（KMO 標本妥当性は 0.923、有意確率 0.001 以下）。3 因子得られた。因子寄与率は第 1 因子 47.8%、第 2 因子 8.9%,第 3 因子 6.7%であり、バランスが良くないが第 1 因子の結果が被験者の多くの考え方が反映されていた。第 1 因子からわかることは、自分自身の意志ではなく、家族への思いや友人による影響によって農業を選ぶことがわかった。大学生については（KMO 標本妥当性は 0.961、有意確率 0.001 以下）、2 因子得られた。因子寄与率は第 1 因子 64.4%、第 2 因子 5.4%,であり、第 1 因子の結果が被験者の多くの考え方が反映されていた。第 1 因子からわかることは、家族への思いや友人による影響によって、自分自身の意志で農業を選ぶことがわかった。

これらの結果から、被験者の高校生や大学生が農業に従事するためには、双方とも、「自分の周りのおかれた環境をより豊かにしたい」ということがわかった。また、高校生も大学生も自分の意志でそれを決断する意志が高く含まれていることが特徴的であった。

表 5　農業に就く理由　回帰分析の結果

（左：従属変数：収入の高さ，　右：従属変数：今でなくいつか農業に働きたい）

	高校生	大学生
	標準化係数	標準化係数
家族の貧困	0.262	0.228
家族の期待	0.144	0.120
収入の高さ	-0.098	-0.118
働いてみたい	0.343	0.195
成功の希望	0.114	0.172
将来の明るい展望	-0.052	-0.063
自分の意志	0.150	-0.095
嫌悪感	0.011	0.192
仕事内容の魅力	0.020	0.026
村の将来のため	-0.063	0.137
就業環境	0.051	0.035
希望者の多さ	0.115	0.066
友人の影響	-0.173	-0.062
自分の家族のため	0.247	0.261
	R^2=0.858	R^2=0.875
	n=374	n=357
	有意確率0.000	有意確率0.000

	高校生	大学生
	標準化係数	標準化係数
収入の高さ	-0.065	-0.050
家族の貧困	0.036	0.250
家族の期待	0.160	0.131
働いてみたい	0.066	-0.042
成功の希望	0.264	-0.061
将来の明るい展望	-0.024	0.340
自分の意思	0.180	-0.114
嫌悪感	0.098	-0.054
仕事の内容の魅力	-0.080	0.037
村の将来のため	-0.042	0.133
就業環境	0.180	-0.091
希望者の多さ	0.120	0.224
友人の影響	-0.040	0.113
自分の家族のため	0.191	0.102
	R^2=0.862	R^2=0.857
	n=371	n=390
	有意確率0.000	有意確率0.000

5.3　人気職業別の職業選択への考え方の違い

高校生と大学生の分析結果から、人気のある職業は観光業と公務員で、次いで医療であった（5.1参照）。これらについての回答傾向を比較し、考え方の違いについて調べた（ノンパラメトリック検定：Kruskal Wallis）（表 6）。「職業選択の考え方」の質問群について、それぞれの設問毎に平均値およびこの 3 群の平均値の差をもとめた。同時に、平均値の比較に追加し、細かい傾向を知るために、この質問群についてどの設問が考え方に強く影響するのかを各職業希望グループ別に因子分析（最尤法：プロマックス回転）（表 7）を行なった。

その結果、高校生では、「都会志向」「お金への執着」「家族を助けたい」「社会貢献」「自分の意志」「家族の事情に左右される」が 3 群の平均値の差が認められた。平均値について、観光業で一番高いものは「都会志向」「お金への執着」「家族を助けたい」、公務員で一番高いものは「家族の事情に左右される」、医療で一番高いものは「社会貢献」であった。さらに因子分析の結果、観光業については、第 1 因子「都会に行くことを自慢できる」第 2 因子「家族を助けたい」第 3 因子「自分で気に入った職業に就きたい」第 4 因子「若いので華やかな都会にいきたい」であった。公務員については、第 1 因子「若いので華やかな場所で働き周りに自慢したい」、第 2 因子「社会貢献をしたい」、第 3 因子「家族を助けたい」であった。医療については、第 1 因子「都会に行くことを自慢できる」、第 2 因子「若いので華やかな世界にいきたい」、第 3 因子「社会貢献」第 4 因子「自分の意志で職業を決めたい」であった。

同じく大学生の 3 群の平均値の差をもとめた結果、「自慢（をしたい）」「自分の意志」「家族の事情に左右される」が 3 群の平均値の差が認められた（ノンパラメトリック検定：Kruskal Wallis）。平均値について、観光業で一番高いものは「自慢（をしたい）」、公務員で一番高いものは「家族の事情に左右される」「自分の意志」、医療で一番高いものはなかった。また、「自慢（をしたい）」については 3 群共に数値が高く、3 群の平均値も 7.5 であり、世間に自慢できる職業を選ぶことも重要視していることがわかる。さらに因子分析の結果、観光業については、第 1 因子「若いので華やかな世界たくさん稼ぎたい」第 2 因子「年齢に関わらず家族や社会に役立ちたい」であった。公務員については、第 1 因子「高い収入で家族を助けたい」第 2 因子「若いから」第 3 因子「この職業で周りに自慢したい」であった。医療については、第 1 因子「家族を助けるために多く稼ぎ、周囲に自慢したい」第 2 因子「若いので華やかな世界にいきたい」第 3 因子「家族に事情があるため」であった。

これらの結果から、職業選択における考え方の違いとして、観光業を選ぶ者は、「家族を助けるために、自分の意志で若いうちに華やかな世界で職業に就きたい」、公務員を選ぶ者は「職業選択は家族の事情に左右されるが、高い収入で家族を助けられる職業を選びたい」、医療を選ぶ者は「社会や家族のために、華やかな世界で自慢できる職業に就きたい」という考え方があることが推測された。

表 6　高校生と大学生の「職業選択の考え方」平均値の比較

		華やかさ	若さ	都会志向	自慢	お金への執着	家族を助けたい	社会貢献	宗教行事のための資金	自分の意思	家族の事情に左右
大学生	観光業	7.6	7.3	6.3	7.6	7.3	7.4	7.1	6.5	7.1	2.9
	公務員	7.6	7.3	6.5	7.5	7.4	7.3	7.4	6.6	6.6	3.9
	医療	7.3	7.1	6.1	7.3	7.0	7.3	7.2	6.5	6.5	2.9
	3群の平均値	7.5	7.3	6.3	7.5	7.3	7.3	7.2	6.6	6.9	3.2
	3群の平均値の差	0.576	0.425	0.571	0.048	0.774	0.284	0.410	0.992	0.001	0.006
高校生	観光業	7.6	7.2	6.6	7.7	7.6	7.8	6.8	6.7	6.9	2.8
	公務員	7.5	7.1	6.1	7.7	7.5	7.4	6.9	6.4	6.6	3.7
	医療	7.5	7.0	6.4	7.7	7.4	7.4	7.3	6.4	6.7	3.6
	3群の平均値	7.5	7.1	6.4	7.7	7.5	7.5	7.0	6.5	6.7	3.4
	3群の平均値の差	0.231	0.738	0.023	0.907	0.025	0.003	0.053	0.226	0.032	0.000

*ノンパラメトリック検定（Kruskal Wallis検定）

表 7　高校生と大学生の「職業選択の考え方」因子分析の結果

	大学生								高校生											
	観光業希望		公務員希望			医療希望			観光業希望				公務員希望			医療希望			
	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
華やかさ	0.600	0.044	-0.177	0.526	0.308	-0.128	0.894	-0.088	0.118	0.055	0.126	0.493	0.637	-0.041	0.001	-0.051	0.626	0.010	0.072
若さ	0.995	-0.412	-0.020	1.038	-0.065	0.102	0.870	-0.014	0.067	-0.049	0.026	0.453	0.669	0.081	-0.079	0.027	0.996	-0.011	-0.050
都会志向	0.333	0.285	0.346	0.188	0.009	0.251	0.266	0.082	0.642	0.014	0.069	-0.339	0.075	0.370	0.081	0.294	0.086	0.061	0.257
自慢	0.475	0.108	-0.093	0.023	1.036	0.769	0.003	0.154	0.674	-0.105	-0.029	0.213	0.801	-0.003	0.047	0.364	-0.083	-0.125	0.378
お金への執着	0.651	0.272	0.725	0.103	0.135	0.684	0.041	0.086	0.570	0.167	-0.107	0.116	0.519	-0.087	0.273	0.976	-0.010	-0.144	-0.084
家族を助けたい	0.607	0.439	0.820	-0.162	0.089	0.835	0.108	0.017	0.010	0.998	-0.066	0.038	0.022	0.027	0.981	0.708	-0.038	0.245	-0.138
社会貢献	0.514	0.319	0.322	0.262	0.275	0.525	0.167	-0.195	-0.147	0.099	0.593	0.106	-0.090	0.726	-0.067	0.028	-0.001	1.010	-0.055
宗教行事のための資金	0.532	0.282	0.601	-0.126	-0.014	0.363	0.110	0.286	0.089	0.343	0.382	-0.060	-0.045	0.617	0.293	0.332	0.093	0.071	0.318
自分の意思	0.502	0.206	0.468	0.283	-0.216	0.780	-0.296	-0.219	0.048	-0.162	0.687	0.024	0.294	0.349	-0.263	-0.100	-0.019	0.135	0.670
家族の事情に左右	-0.008	0.163	0.326	-0.012	-0.120	-0.015	-0.089	0.982	-0.112	0.099	0.007	0.177	-0.170	0.015	0.006	0.040	-0.042	0.145	-0.340
因子寄与率（%）	42.3	11.2	39.2	13.7	10.6	36.7	18.6	12.4	25.4	15.0	11.6	10.9	32.1	14.1	11.1	28.4	14.3	13.5	10.5
	KMO標本妥当性=0.868 有意確率 p<0.000		KMO標本妥当性=0.780 有意確率 p<0.000			KMO標本妥当性=0.722 有意確率 p<0.000			KMO標本妥当性=0.637 有意確率 p<0.000				KMO標本妥当性=0.724 有意確率 p<0.000			KMO標本妥当性=0.571 有意確率 p<0.000			

6.　考察

本調査で得られた結果について、3.で述べた、明らかにすべき点に沿い下記に考察を加える。

①　職業選択における考え方

高校生と大学生の分析結果から、人気のある職業は観光業、公務員、次いで医療であった。一方、農業を希望したのは高校生で 2%8 名、大学生 1%4 名のみであった。親が農業に就いている被験者に人気のある職業は 1. 観光業、2. 公務員であり、高校生も大学生もこの中で 1%未満のみ農業を継ぐ者がいることがわかった。また、因子分析の結果、高校生と大学生に共通する点は、職業選択は「家族を助けるため」という気持ちが大きく、しかしながら「若いうちは華やかな世界に挑戦する」、という考え方を持っていることがわかった。男女の回答傾向について、大学生と高校生の結果をそれぞれ平均値の差を比較した結果、高校生大学生共に、男女の回答傾向に平均値の差が見られた質問は「農業に関する職業の印象」質問群のみで、男子のほうが各設問の考えがより多く当てはまる傾向を示している。これはつまり、男子のほうが農業で働くことを想定すると、自己の関心と周囲の状況から判断して、農業で就労しようとする意思が高いことがわかった。

②　農業を職業として選択する際の考え方

被験者の高校生や大学生が農業に従事するためには、双方とも、自分の周りのおかれた環境が影響するということがわかった。また、回帰分析の結果も因子分析の結果も、高校生も大学生も自分の意志でそれを決断するという点が特徴的であった。先の①で述べた様に、農地を所有しており農業の継承責任がある者の多くが卒業後の希望職業が農業ではないことがわかった。

③　人気職業別の職業選択への考え方の違い

人気のある職業は観光業、公務員、次いで医療であった。これらの人気のある職業ごとの職業選択の考え方は、観光業を選ぶ者は、「家族を助けるために、自分の意志で若いうちに華やかな世界で職業に就きたい」、公務員を選ぶ者は「職業選択は家族の事情に左右されるが、高い収入で家族を助けるために職業を選びたい」、医療を選ぶ者は「社会や家族のために、華やかな世界で自慢できる職業に就きたい」という考え方があることが推測された。

さらに、本研究の仮説としては、「発展途上国の世界的観光リゾート地における現地住民である若者は、職業選択において華やかな世界で働くことが出来、かつ収入が高い観光業を選ぶ」であった。これを上述の結果から検討すると、観光業だけでなく並んで公務員と、次に医療が人気があった。華やかな世界は観光業だけでなく医療を選択する者の考え方にもあてはまり、また収入が高いのは公務員にもあてはまった。このため、仮説は間違ってはいないが、正確に正しいとは言えなかった。

7. 最後に

本研究の結果から、インドネシアの中央政府は、農業に夢を見いだせない若者に、将来の製剤的成功や自慢が出来る職業としての夢を与えるため、農作物の卸売価格の上昇や、農業技術が向上するための研修、農業機械購入の補助金などの政策を強化する必要がある。州や県では農業専門家の派遣や、各地域での課題を詳細に把握し、それに見合った対策を立てる必要がある。各レベルでそれぞれが農業の衰退に危機感を持ち、世代交代する若者が農業を見直せる、かつ観光業と公務員の様に生計を立てていけるような対策を早急につくっていく必要があろう。

本研究の今後の課題としては、発展途上国では職業選択の機会が幅広い世代であるため、農業に就く可能性のある中学生や小学生、さらに卒業後の社会人を対象とした意識調査の必要性がある。これに関しては、卒業後の実際に就職した後の社会人に関しては、インタビュー形式の意識調査を 2018 年夏に実施を開始した。中学生や小学生についてはアンケート調査に対する回答態度のリテラシーに欠けるので実施が難しいため、今後の必要性に応じて実施を検討する予定である。

本研究の今後の展開としては、発展途上国の世界的観光リゾート島は、例えばタイのプーケット島、マレーシアのランカウイ島、フィリピンのセブ島などがあるが、それらの場所も将来調査が行われ、発展途上国における国際観光島における職業選択の実態としての成果が取りまとめられることが期待される。しかしながら、これらを実現するには時間を要する。将来、発展途上国における国際観光島の抱える農業と観光業の問題として取りまとめることを計画し、段階的に研究成果を示したい。

参考文献

1)安達智子(2001)『大学生の進路発達過程--社会･認知的進路理論からの検討』教育心理学研究　49 (3)pp326-336
2)安達智子 (2003)『大学生の職業興味形成プロセス』教育心理学研究　51 pp308-318
3)安達智子 (2004-12)『大学生のキャリア選択 その心理的背景と支援』日本労働研究雑誌 46 (12)　pp27-37
4)足立浩一 (2015)『バリ島における観光開発が伝統社会におよぼす影響に関する考察』福山大学経済学論集
5)浦上昌則(1995)『学生の進路選択に対する自己効力に関する研究』名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科　42 pp115-126
6)木村真人・水野治久 (2004)『大学生の被援助志向性と 心理的変数との関連について―学生相談・友達・ 家族に焦点をあてて― 』カウンセリング研究　第 37 巻 pp260-269
7)下村英雄・木村周 (1997)『大学生の就職活動ストレス とソーシャルサポートの検討』進路指導研究　18 巻 pp9-16
8)永野由紀子 (2007)『インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体』山形大学紀要（社会科学）第 1－4 巻 2 号
9)成 田 絵 吏 ・森 田 美 弥子 (2012)『大学生における職業の選択に関する被援助志向性の研究』名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学　Vol.59 pp91 -100.
10)バリ州　中央統計局 職業人口　男女別 2013 年結果
11)バリ州 労働移民局「学歴と職業分野」2015 年 8 月
12)盧回男 (2016.9)『「ライフキャリア志向性」を規定する家庭環境要因と個人特性要因の効果 ―日韓比較を通して―』　日本女子大学現代女性キャリア研究所　現代女性とキャリア, Research Institute for Women and
13)Ginzberg, Eli, Sol W. Ginsburg, Sidney Axelrad(1951) “Occupational choice : an approach to a general theory” New York Columbia Univ. Press.
14)8epublika Online “NTP Turun, Pendapatan Petani di Bali tetap Rendah”『引き続き債券を抱えるバリ農家』17 May 2016
http://nasional.republika.co.id/berita/nasional/daerah/16/05/17/o7bg08359-ntp-turun-pendapatan-petani-di-bali-tetap-rendah
15)Super, D. E.(1980) “A life-plan, life-space approach career development” Journal of Vocational Behavior 16 (3) pp282-298.
16) The Bali Times “Economic of Bali is Predicted Growing 7.03%” December 04, 2015

*本研究は、インドネシア政府認可環境財団 Bali Biodiversitas と現地で共同の調査研究を行なっている。